

## 解題

### ブリギッタ・シュミット - ラウバー 質的インタビュー、あるいは対話の技能

OIKAWA Shohei  
及川 祥平

CHRISTIAN GÖHLERT  
クリスチャン・ゲーラット

本稿は、ブリギッタ・シュミット-ラウバー (Brigitta Schmidt-Lauber) の「質的インタビュー、あるいは対話の技能 (Das qualitative Interview oder : Die Kunst des Reden - Lassens)」の全訳である。

日本の民俗学の国際化の遅れ、あるいは学際化への対応のなさは、ながらく問題点として反省的に批判されてきた。近年は中国・韓国等の東アジアの民俗学間での連携や、ドイツ語圏、アメリカの民俗学との交流が重点的に試みられている。本誌『日常と文化』もそのような実践の一つであることは言うまでも無い。訳者らは 2011 年のアルブレヒト・レーマン (Albrecht Lehmann) の日本民俗学会における招聘事業以降、上記の問題点の克服にむけたささやかな取り組みとして、レーマン氏が編者に加わっているドイツ民俗学の方法論の手引書『民俗学の方法 (Methoden der Volkskunde)』の翻訳に取り組んできた。同書はドイツ語圏の民俗学の状況がコンパクトにまとめられており、ドイツ語圏の大学でもテキスト化されている。ドイツ語圏の状況を知る上で適切な文献であり、日独間の民俗学を方法的レベルで比較可能にし、両者の交流を促進する上でも必読の書といえるだろう。ここに翻訳したブリギッタ・シュミット - ラウバー論文もまた同書に収録されており、ドイツ民俗学における調査法を歴史的かつ方法論的に詳述するものである。

本稿の原著者ブリギッタ・シュミット・ラウバー氏はドイツ語圏の民俗学における方法的議論に長けた研究者の一人である。氏は『民俗学の方法』において、「フィールドワーク-参与観察による文化分析 (Feldforschung – Kulturanalyse durch teilnehmende Beobachtung)」なる章も担当している。氏はドイツ北部の都市キールに生まれ、キール大学、ハンブルク大学、ケルン大学で民俗学・民族学・社会史・経済学をおさめた。氏からの私信によれば、民俗学者のアルブレヒト・レーマン (Albrecht Lehmann)、民俗学者・民族学者でもあるトーマス・ハウシルド (Thomas Hauschild)、アフリカ研究の民族学者ユルゲン・イェンセン (Jürgen Jensen) に影響を受けたといい、複数ディシプリンの蓄積を吸収しながら研究者として自己をビルドアップしてきた。教歴としては、客員教授・講師としてウィーン大学、ゲッティンゲン大学、バーゼル大学、チューリッヒ大学、ハンブルク大学で教鞭をとったのち、2006 年からゲッティンゲン大学文化人類学・ヨーロッパエスノロジー研究所で教授を務め (2009 年まで)、以降はウィーン大学ヨーロッパエスノロジー研究所の所長に就任している。

シュミット-ラウバー氏の研究領域は、現在の日常文化、都市文化、移民研究にわたっている。1997年に、幅広いフィールドワークの成果と歴史学的アプローチに基づく『「おかしな肌の色」—ナミビア系ドイツ人の日常の実践としてのエスニシティ（“Die verkehrte Hautfarbe”. Ethnizität deutscher Namibier als Alltagspraxis)』（Berlin/Hamburg: D. Reimer, 1998）で博士の学位を取得し、2003年には日常文化に重点をおいた『居心地—文化学的アプローチ（Gemütlichkeit. Eine kulturwissenschaftliche Annäherung.）』（Frankfurt a.M./New York: Campus, 2003）によって大学教授資格を取得している。都市文化論については、「中規模の都市（Mittelstadt）」への関心を、独自の視点としてあげることができるだろう。氏は人口2万～10万人程度の都市の研究を重視している。それは、従来の都市研究が大都市に関心を向け、大都市を基準とした議論を組み立ててきたことに対する批判でもあるという。

日本の民俗学では、「話者」（インフォーマント）との対話的データ収集法を「聞き書き」の名で呼びならわしてきた。無論、それは学際的次元では質的インタビューに包摂されるものであり、文化人類学や一部の社会学・歴史学でも基礎的方法とされている。日・独の民俗学のインタビューをめぐる方法的相違の相違を端的に指摘するならば、学の伝統を現在の主要な方法論とからめながら固有の技法として昇華させていく方法「論」のあり方ではあるまいか。

ドイツ語圏の民俗学には民話研究の伝統がある。口頭での会話を介したデータ収集を、固有の学史（あるいは学的個性）として認識している。隣接分野における口述データの取り扱いに対し、民俗学がどのような独自性を主張できるかがよく理解されているといえる。現在のドイツ語圏においては、民俗学は文化人類学と（そして経験文化学やヨーロッパエスノロジーと）称しているが、日本の民俗学の場合、海外調査を基本とするエスノロジーから展開した文化人類学との間にどのような方法的相違を見出すことができるのだろうか。あるいは、どのような悩みや強みを共有しているのだろうか。方法論的水準での対話は必ずしも十分に尽くされているとは言えない。それは、一部の社会学や歴史学との相違を、どのような学的伝統のもとで強調できるのかという問題とも関わっているだろう。2010年に開催された日本民俗学会の国際シンポジウム「オーラルヒストリーと〈語り〉のアーカイブ化に向けて—人類学・歴史学・社会学との対話」において展開されたような議論が、今後より深められていくべきと認識する。

一方、日・独の民俗学的方法的相違を考えた時、日本においては「よい話者」からは早くに峻別された村の有識者への調査を、ドイツ民俗学は比較的近年まで堅持してきたことが本稿からはわかる。このような「代表性の原則（Gewährmannsprinzip）」のあり方をはじめ、方法論をめぐる学史の中に垣間見える微細な相違にこだわっていくことは、日・独の民俗学の性格的相違や共通性、今後の連携のあり方を考えていく上で有益な示唆を与えるものであろう。